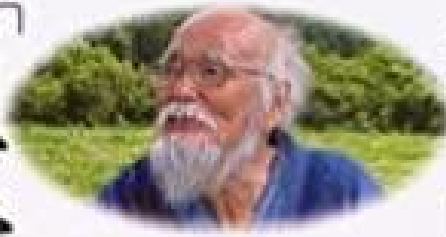


(最後ちょっと切れてしまってるけどごめんね——>< by あかね)

福岡正信



自然農法

わら一本の革命

春秋社

何もしない農法を目ざす

それからの三十五年、私はもう、全くのただの百姓で、現在まできたわけなんです。

その間、一冊の本を読むわけでもなし、外へ出て人と交際するでもない、ある意味で言いますと、まるっきり時代おくれの人間になってしまいました。

だが、その三十五年の間に、私はただひとすじに、何もしない農法を目ざした。ああしなくてもいいのじゃないか、こうしなくてもいいのじゃないか、という考え方、これを米麦作りとミカン作りに徹底的に応用した。

普通の考え方ですと、ああしたらいいんじゃないか、こうしたらいいんじゃないか、といって、あんなりったけの技術を寄せ集めた農法こそ、近代農法であり、最高の農法だと思っているのですが、それでは忙しくなるばかりでしょう。

私は、それとは逆なんです。普通行われている農業技術を一つ一つ否定していく。一つ一つ削っていくって、本当にやらなきゃいけないものは、どれだけか、という方向でやっていけば、百姓も楽になるだろうと、楽農、惰農を目ざしてきました。

結局、田を鋤く必要はなかったんだ、と。堆肥をやる必要も、化学肥料をやる必要も、農薬をやる

必要もなかったんだ、という結論になったわけです。そういうものが必要だ、価値があることだと思ひ、効果があるように思うのは、結局、人間が先に悪いことをしているからなんです。価値があるような、効果が上がるような条件を、先に作っているということなんです。

人間が、医者が必要だ、薬が必要だ、というのも、人間が病弱になる環境を作りだしているから必要になってくるだけのことであって、病氣のない人間にとっては、医学も医者も必要でない、ということと同じことです。

健全な稲を作る、肥料がいらないような健全な、しかも肥沃な土を作る、田を鋤かなくても、自然に土が肥えるような方法さえとっておけば、そういうものは必要でなかったんです。あらゆる、一切のことが必要でないというような条件を作る農法。こういう農法を、私はずっと追求しつづけてきたわけです。

そして、この三十年かかって、やっと、何もしないで作る米作り、麦作りができて、しかも、収量が、一般の科学農法に比べて、少しも遜色がない、というところまで来た。

ということは、人間の知恵の否定です。それが、今こそ実証できたということになる。これはもう一事が万事であつて、他のあらゆることにも適用できるはずなんです。

たとえば、教育というものは、価値のあることだと思つてゐる。ところが、それはその前に、教育に価値があるような条件を人間が作っているんだということにまず問題がある、と私は言いたいんで

す。教育なんて、本来は無用なものだけれど、教育しなければならぬような条件を、人間が、社会全体がつくっているから、教育しなければならなくなる。教育すれば価値があるように見えるだけにすぎないということです。

そして、教育ということに關して、私はこういうことを感じています。

終戦前に一度ミカン山へ入って、自然農法を標榜したときに、私は無剪定ということをやって、放任した。私ははじめ、「放任」ということと、「自然」ということを、ごっちゃにしていたんですね。ところが、枝は混乱する、病虫害にはやられるで、七十アールばかりのミカン山を無茶苦茶にしてしまった。私は、そのときから、自然型とは何ぞや、ということが、常に問題として頭にあって、これだということを確信するまでに、永い間模索してきました。そして、やっと自然型とは、これだな、という確信を持てるようになった。自然型というものを作るようになってくると、病虫害の防除も必要なくなって、農薬がいらなくなった。剪定というような技術も必要なくなった。自然というものがわかれば、人間の知恵なんて必要ないんです。

子どもの教育にしたって同じことです。私も初めそれで失敗したが、放任ということと、自然ということが混同されていて、放任が自然であるかのように錯覚している場合が多いんです。

いわゆる放任状態にしておくから、教育しなきゃならなくなるとも言える。自然だったら、教育は無用なんです。

たとえば、子どもに音楽を教えることだって、不自然で、不必要なんです。子どもの耳は、ちゃん

と音楽をキャッチしている。川のせせらぎを聞いても、水車のまわっている音を聞いても、森のそよぎの音を聞いたって、それが音楽なんです。本当の音楽なんです。

ところが、いろんな雑音を入れておいて、耳を混乱させておいて、つまり、まちがった道に子どもを導いて、子どもの純なる音感を墮落させてしまう。これでは不自然な状態、いわゆる放任状態になってくる。そして不自然な状態において放任しておく、もう小鳥の声を聞いても、風の音を聞いても、それが歌にならないような頭になってしまう。

そんな頭にしておるから、今度は一生懸命で音階とか音符とかを教えて、歌がうたえるように、音楽が聞けるように、作曲できるように教育しなければならなくなる。

自然のまま、そのまま育てた場合には、本当の耳が澄みきっているから、流行にのったような音楽や楽器は弾けないかもしれない。ピアノやバイオリンは弾けないかもしれないけれども、そんなものは、本当の音楽を聞く耳、歌う口とは無関係だと思ふんです。歌がうたえなくても、歌をうたう心を持ってさえおれば、それでさしつかえないんだし、五線譜にあらわすことはできなくても、その耳、心が音楽にのっておれば、いつもそれで喜びを感じておれば、それで一向にさしつかえない。人間の心の中に音楽があるということが先決であるのに、その心を失わせないように育てていくという音楽教育はしなくて、それを不自然な環境の中でもやらせて、しかも、その状態のまま放任しておいて、今度は、やれ、詩がうたえない、歌がうたえない、音痴だ、と言って子どもの尻をたたく。音痴なんというのは、本来ないはずなんです。自分たちが子どもを音痴にしておいて、今度はそれを直そうと

する。教育者も、人間のゆがみを直す修繕屋にしかすぎない。

一般には、自然がいいぐらいのことは誰でも考えている。ただ、何が自然なのがわかっていない。自然を不自然にする最初の出発点は何なのか、ということがはっきりつかめていないんです。

たとえば、木のような場合だと、あの出たばかりの新芽を、ほんの一センチでも、人間がハサミで摘むと、もうその木は、絶対にとりかえしのつかない、不自然なものになってしまう。

自然は、人間がほんのちょっとした知恵を加える、ちょっとしたハサミを加える、ちょっとした技術を加えたときに、とたんに狂ってしまう。その木の全体が狂ってしまう。とりかえしのつかない狂いを生じてしまう。

そうして狂わしておいて、そのまま放任しておけば、初めの自然の秩序というものが狂ったまま、バランスの崩れたまま成長するということですから、枝と枝が衝突する。

新芽をほんの一センチ摘んだために、本来なら、枝も葉っぱも葉序に従って規則正しく発生し、そのすべてが平等な日光を受け、枝は枝の働き、葉は葉の働きをするのだけれども、人間の手がちょっと入ったがために、枝と枝とがけんかする。交差したり、上下が重なってきて、もつれ合うようになってしまう。陽が当たらない部分は枯れてきたり、病虫害が発生したりする。庭の松なんかでも、植木屋さんが、ちょっとハサミを入れると曲がりくねってきて、もう翌年も剪定をしなければ、すぐに枯枝が出てくる、あれと同じです。

結局、人間が、その知恵と行為でもって、何か悪いことをする。悪いことをしておいて、それに気

づかないままに放っておいて、その悪いことをした結果が出てくると、それを懸命に訂正する。そして、その訂正したことが効果をあげると、いかにもそれが価値あるりっぱなもののように見えてくる、というようなことを、人間はあきもせずやっているわけです。まるで、自分で屋根瓦を踏んで割っておいて、水もりする、天井が腐る、といった、あわてて修繕して、りっぱなものができた、と喜んで、いるのと同じです。

科学者にしあって、そうですね。

偉くなろうと思って、夜も昼も一生懸命本を読んで勉強して、近眼になって、いったい何のために勉強するんだといえ、偉くなって良いメガネを発明するためだ、というようなことなんです。勉強しすぎて近眼になって、メガネを発明して有頂天になっている、これが科学者の実体だと思います。

もう少し具体的に言うなら、ロケットをこしらえて、月の世界へ行くようになって、人間はえらいことやったと喜んでいるけれども、そのロケットを何のために使うかというと、ロケットを打ち上げる燃料が足らんから、ウランを取りに行くんだ、という。ウランを持って帰って、ロケットを打ち上げる。そして打ち上げるロケットには、原子炉の火で出来た、ウランを燃やして出来た廃棄物の死の灰を、地球では捨て場所がないから、結局、コンクリートづめにして宇宙の外まで発射するのだ、と石原さんが言っておりました。あのメガネの話と寸分ちがわなことが起こっている。

いくら、えらい科学者だ、教育者だ、芸術家だといっても、結局、究極の原点から見直してみると、人間は何をやったわけでもないんだ、ということです。それをこの一株の稲や麦が、そしてミカンが